

社会科学における観察者の役割

—批判的实在論に基づく中小企業研究の方法論への示唆を求めて—

曾 國 哲¹

Revisit of the role of social scientists' observation:
Implications for SMEs research methodology based on Critical Realism

Kuo-Che Tseng (Niigata University Japan)

要旨

本研究ノートは、従来のメタ理論の「客-主」の対立を乗り越えようとする批判的实在論の人間論と方法論に基づき、社会科学を行う観察者の役割を明らかにするものである。本稿では従来のメタ理論と批判的实在論のそれぞれの人間論と方法論をレビューし、その後、Andrew Sayerの「主体と客体」論と佐藤郁哉の「現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳」論を統合し、更に野村優が再概念化した批判的方法論的多元主義のステップ概念を取り込んで観察者の役割を議論する。結論として、観察者はより良き未来に赴くため、既存の思想構造に立脚しつつ現場への絶え間ないアプローチによりその思考構造にインパクトを与え続けている存在であるとみなすことができる。最後に組織論とりわけ複雑性が富む中小企業研究に対する示唆を提示し、批判的实在論に立脚しながら学術世界と現場世界との間の推論の隙間を認識論的に埋められ得ることを論じる。

キーワード：批判的实在論、観察者の役割、主体と客体、現場の言葉と理念の言葉との相互翻訳、批判的方法論的多元主義、中小企業研究への示唆、学術と現場との隙間埋め

1. はじめに

組織論とりわけ複雑性に富む中小企業などの社会科学を研究する際には、自らの研究スタンスを把握することが重要となる。それはアンケート調査や非構造化インタビューなどの実践的手法だけに留まらず、研究対象にアプローチして説明するための理論的裏付けを提供するメタ理論へ遡って議論する必要があることを意味する（坂下 2002；三井 2016；須田 2019）。メタ理論は存在論、認識論、人間論、方法論の四つの基礎概念に基づき、客観主義と主観主義という相互排他的な関係に基づいた二つのスタンスから論じられている（Burrell and Morgan 1979）。一方、1970年代から提示された批判的实在論では、存在論の必然的な先行性を指す「存在論的实在性」を存在論として立脚しつつも、人間の主観性を指す「認識論的相対主義」を認識論として議論し、従来の「客-主」論の対立を乗り越えようとするより新しい科学哲学の思惟を展開している（Bhaskar 1975）。

社会科学方法論はこれまで数多く議論されてはいるが、観察者の役割はいまだに十分に議論されていない。観察者の役割が重要な論題として取り上げられる理由は、観察者を含む多くの人々が社会の

¹ 新潟大学経済科学部・特任助手 / 新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程 (tsengkc@econ.niigata-u.ac.jp)

中で生きていく上でどのように実在に迫っていくか、その観察プロセスにおいて人々の認識がどのように変化するかを理解することが重要だからである。よって、筆者は本研究ノートを通じて社会科学の領域での観察者の役割を議論する。

本稿の構成は以下のようになっている。第2章で「客-主」のメタ理論とりわけ人間論の概要を見ていき、その後、批判的実在論をレビューする。第3章では、「客-主」の方法論を概観し、批判的実在論の「批判的方法論的多元主義」をレビューする。第4章では、Sayer (2010=2019) の「主体と客体」論と佐藤 (2008) の「現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳」論を統合し、野村 (2016) の批判的方法論的多元主義のステップの概念を取り込んで観察者の役割を考察する。第5章で本研究ノートの結論を述べる。

2. 「客-主」対立におけるそれぞれの人間論、及びそれを乗り越えようとする批判的実在論

社会現象に関する人間論に基づく問い、すなわち経営現象を含む社会現象は人の外在に客観的に存在し影響を与えているものか、それとも人の内部世界にあって人の思想により作り出されるものか、は長らく議論されてきた難問である。また、人間論は研究対象の構造と人々との関係を理解する際に無視できない概念であり、同時に、観察者（研究者）とその観察者を取り囲む構造（教育環境や学派など）との関係を示している概念でもある。

2.1. 客観主義と主観主義のそれぞれの人間論

人々と社会構造との相互関係を議論する際に、最初に注目する必要があるのは Émile Durkheim と Max Weber である。Durkheim は統計データを使い、教会という共同体による強い社会的な結合を持つカトリックは、信仰を神と個人との契約であるとし社会的な結合がより弱いプロテスタントよりも自殺率が低くなることを実証した。すなわち、個人的問題と思われがちな自殺問題は、実は社会構造に大きく影響されていることを明らかにした (Durkheim 1897=1985)。一方、Weber は外部からの影響よりも人々の意図や動機に着目し、それらを「特殊個体的な彩色を持つ具体的な発生的関連という姿、(中略)、『歴史的構成概念』というものの本質に根ざしている」ものだとして (Weber 1920=1988: 26)、極めて主観的なものであると捉えた。まとめると、Durkheim の概念は方法論的集団主義や構造が個々人に影響を与えるという「下向きのモデル」と称されるのに対し、Weber の概念は方法論的個人主義や個々人が構造を作り上げる「上向きモデル」と称される (Bhaskar 1998)。人間論に立脚して言い換えれば、前者は決定論 (客観) である一方、後者は主意主義 (主観) であると考えられる (Burrell and Morgan 1979)。

人間論の相違により実践理論に関する認識の違いも垣間見られる。Sydow et al. (2009) は特定の組織や産業の構造形成が特別な分岐点を通じてから、自己強化にメカニズムにより自主的に形成し出し、最後にロックインするものであるとして、「経路依存性」を概念化した。一方、Garud et al. (2010) は Sydow たちの概念とは逆に「経路創造」を前面に出した。Garud たちは、経路は確かに自己強化メカニズムによって形成されるものであるが、アクターは完全に経路形成に埋め込まれるのではなく自己強化メカニズムを戦略的に操作できる存在であるとして、人間の主体性を強調している。

Sydow et al. (2012) は更に再帰性のあるアクターを経路分析に取り入れて議論し、経路形成分析を提示した。研究対象とする経路をフォーカル・レベル (例えば、ハイテク産業のイノベーションの経路) とし、より広い社会的・経済的環境をマクロ・レベル (例えば、企業間フィールド) とし、より小さい特定の範囲または個体をマイクロ・レベル (例えば、個別企業) としている (Sydow et al. 2012: 168)。また、異

なる社会的・経済的な特性に属するアクター（例えば、半導体生産設備メーカー、チップメーカー、ベンチャー・キャピタリスト）も重要な分析要素とされている (Sydow et al. 2012 : 171-172)。彼らの 2012 年の論文では、総じて、経路形成の研究に人間論の客観性（依存的展開）と主観性（人々の主体性）の対立に、実践的な素晴らしい解決策を提示したが、メタ理論の概念としての人間論への議論は深掘りされていなかった。

2.2. 「客-主」対立を乗り越えようとするメタ理論：批判的实在論と分析的二元論

「客-主」の対立を「不幸な二元論」として批判し、その対立を乗り越えようとして提示されたメタ理論は、批判的实在論である (Danermark et al. 2019 : 2-4)。批判的实在論は、経験論に基づく客観・実証主義の「認識論的个人主義」や「人間中心主義」を批判しながら、存在論的实在性を大前提とするメタ理論である。自然現象または社会現象は階層化されており、「経験的現象」(経験) や「実際に発生した出来事」(現実) を生成する「因果メカニズム」(实在) を超越的に発見する必要がある (Bhaskar 1975)。経験的に観察した現象の傾向性や出来事を生成する因果メカニズムを超越的に推論するというのは、その因果メカニズムを発見し、更に「もっともらしい説明」を磨いて付与することが重要であるということの意味している。

また、批判的实在論では、实在は「オープン・システム」であるため (Bhaskar 1998 : 23)、観察や研究により「処方箋」を提供できないことに留意する必要がある (Ackroyd and Karlsson 2014 : 44)。筆者からすれば、処方箋または実証・客観主義で証明された事物への「説明」は、オープン・システムであるはずの实在を「生成する因果メカニズムを深掘りせずに現象をそのまま『凍らせてから』」観察して得た結果である。批判的实在論者からすれば、経験論に基づく実証主義からの「説明」は説明たり得るものであらず、「現象研究に対する薄っぺらい記述」に過ぎないのである (O' Mahoney and Vincent 2014 : 4)。

批判的实在論を社会学で論じたのは「社会行動の形態転換モデル」であり (Bhaskar 1998)、批判的实在論の人間論と捉えることができる。Bhaskar は Berger and Luckmann (1966) の「構成概念」に対して批判的な考察を行い、「創造」の概念を排撃し、社会構造と人々の相互作用を「再生産」と「転換」と捉えている (Bhaskar 1998 : 36)。なぜなら、人々は何もない宙から物事を創出することができないからである。

社会行動の形態転換モデルに基づき、Archer は構造と人間エージェンシーとの弁証法的な展開に注目する「分析的二元論」を提示した (Archer 1995)。社会構造は常に人々に先行しているが、その構造が持つ力は「人々の行動や思考を通じて」発揮され、「創発的特性」と呼ばれる。人々は諸々の創発的特性（例えば、組織、階級、ジェンダー）を発揮し、相互作用して既存の社会構造に何らかの影響を与え、社会構造を再生産したり転換したりするものである。今現在の人々の相互作用や相互相殺により再生産もしくは転換された社会構造は、次世代の人々に創発的特性を発揮させる既存の社会構造となる。諸々の創発的特性が「必然的かつ相補的」である場合に、従来から構築されてきた社会構造が保たれ、経路依存的になり「形態停滞」を生じさせる。逆に諸々の創発的特性は「偶発的かつ非相補的」である場合には、維持されてきた社会構造が排撃される可能性が高くなり、反対派にとっては経路創造となって「形態生成」に繋がる可能性が高くなる (Archer 1995 ; Greener 2005)。「必然的かつ相補的」である場合の例として、日本の電力会社、政府、学者からなる「原子カムラ」による原子力発電の強いロックインの事例を挙げることができる (Sydow et al. 2021)。

また、制度とアクターの間を、批判的实在論に基づいて論じた論文として、Delbridge and Edwards

(2013)の研究が挙げられる。彼らは既存の制度理論におけるエージェンシーの議論と統合の不十分さから、分析的二元論における「構造とエージェンシーの分離」に基づき、制度的複雑性の条件下に埋め込まれたエージェンシー及びそれらの「条件付けられる行動」を分析した。彼らの研究では、1970年代以降の既存の経済性と効率性を重視したヨット産業に、独立的したデザイナーが介入したことでデザイン性による予算の増大と複雑な交渉が発生し、産業が大きく変化したことが詳述されている。

3. 「客-主」を統合する方法論

ここから、筆者は客観主義と主観主義の方法論をレビューした後に、批判的实在論の批判的方法論的多元主義を見ていく。そうした方法論を理解することにより、観察者が社会現象にアプローチする際にどのようなプロセスを通じて迫っていくかを理解することができる。

3.1. 「客-主」のそれぞれの方法論

客観主義はきちんとしたプロセスに沿って実験を行うものであるため、「法則定率的」な方法論をとる (Burrell and Morgan 1979 : 6-7)。経験的に実証された事物は客観性をもつ事物として「説明」され、一般化されるが、人間科学や社会科学など人間生活を注意深く観察する領域では、人間の複雑性を捉えなければならないとして「実験」から「観察」へと余儀なく退行せざるを得なくなった (野家 2001 : 8)。一方、主観主義では社会現象の複雑性と主観性ゆえに実証し得ないことを前提として、主観主義者は個別の現象に詳細な観察を通じて「理解」し、厚い記述を生み出す「個性記述」をとる (Burrell and Morgan 1979 : 6-7)。オフィスで統計的データを弄るだけではなく、特定のフィールドに密着して観察すること (Geertz 1988)、社会現象や人間の複雑性をより詳細に把握し、社会的世界のリアリティの「真実らしさ」 (Verisimilitude) に迫っていく方法論としてその有効性が支持されている (Ponterotto 2006: 547)。

もっとも、上述した客観主義における厳密な実験を通じて理論や概念などの一般化を講ずるのは、20世紀前半のウィーン学団による「論理実証主義」の思惟であることにも留意しなければならない。論理実証主義者は統一科学やラジカルな還元主義の旗を掲げ、自然科学から人間科学までの全ての科学を一つの方法によって統一することを目指していた。その後、20世紀に入り、60年代から議論され始めた反証可能性やパラダイムに関する議論から、論理実証主義による統一科学的・還元主義的、いわゆる純粋無垢な科学研究の結果に対して大いに疑問が投げられてきた (野家 2001 ; 三井 2016)。

似たような議論は、ほぼ同じ時期に歴史学でも起きた。Carr (1961=1962) は、当時の歴史研究では、決定論を連想させてしまう「法則」という言葉は既に使用せず、代わりに「説明」、「解釈」、「状況の論理」という言葉が用いられるようになったと述べた。因果的見方を退け、機能的見方をとるようになったが、物事が事実として如何に連鎖的に起ったかという問いがどうしても含まれるため、「なぜ」という問いへ連れ戻されることになるとも指摘した (Carr 1961=1962 : 129-130)。ここで、客観性を保つ歴史観から過去に発生した諸事実の間の複雑性と関連性を重要視する歴史観へと認識論の移行が垣間見られる。確かに過去に発生したことは、我々が変える力を持っていないとして客観的な事実であると捉えられる。ただし、歴史は過去に発生した事実を編年史のように記述するだけで歴史たりうるわけではなく、歴史家が彼らの当時の立脚点からより良き未来に赴くために過去を振り返りつつ作成して初めて成り立つものである。すなわち、歴史は、客観性 (過去に発生した事実) と主観性 (歴史家の主観的解釈) を仲介するものであると捉えるべきである。ここでも歴史家は単なる構造に埋め込まれて発生した事実の連鎖を

淡々と記述するか、それともそれらの事実を意図的に拾い上げて解釈するか、という人間論の問いにつながる。

20世紀半ば以降、実証を通して一般化する思惟と、実証不可能を前提として複雑性を保つ思惟との相互接近は、具体的な研究手法としても議論されている。量的アプローチと質的アプローチとをシングル・スタディまたは一つの調査のプログラムに導入する混合研究法(MMR)は40年間盛んに議論されている(Tashakkori and Creswell 2007)。また、MMRの一部だと論じられているが(Kahwati and Kane 2019)、事実を構成する因果条件への量的手法による実証と、ケース・スタディが抱く複雑性とを同時に把握する質的比較的分析(QCA)は、社会科学、政治科学、経営学などの領域で具体的な研究手法として講じられている(Meuer and Fiss 2020)。MMRとQCAにおける量質統合は、パラダイム間の相互排他性を間接的に批判していると思われるが、その相互排他性を乗り越えるためにメタ理論的な裏付けが必要であるとも考えられる(野村 2016: 141)。

3.2. 批判的实在論における批判的方法論的多元主義

批判的实在論は、「客-主」と「質-量」の不幸な二元論から脱却するため、批判的方法論的多元主義を方法論とする(Danermark et al. 2019)。批判的实在論者は一つの社会現象に対し、その現象を生み出す因果メカニズムを発見するために超越的推論に基づくインテンシブ・アプローチと、その推定されている因果メカニズムを正当化するためにエクステンシブ・アプローチを段階的にとるのである(野村 2016)。

インテンシブ・アプローチでは、観察者が経験的に観察した傾向などから始まり、因果メカニズムの発見に迫っていく推論方式が要求される。そこで発見された因果メカニズムは、伝統の経験論に基づいて正確に実証された因果メカニズムとは異なり、あくまでも可能性のあるものとして導出されるものである。すなわち、「因果メカニズムそれ自体は、経験的実証によって正当化することも棄却することもできない」のである(野村 2016: 152)。対して、エクステンシブ・アプローチは、その推定されている因果メカニズムを正当化するために、その因果メカニズムが発揮していると考えられる研究対象に一つか複数かの「条件」を入れ、異なる条件下でその因果メカニズムに関連付けている経験的事実を考察することを通じて因果メカニズムへのもっともらしい説明を磨く作業であるとされている(野村 2016: 153)。

たとえば、日本は原子力発電大国であるという経験的認識から、日本発電産業が原子力発電にロックインしている事実を通じて、「原子カムラ」が力を発揮しているということがわかる(Sydow et al. 2021)。更に深く考察すれば、電力会社、政治家、学者のそれぞれが利益を追求していながらも協力関係となってしまっているという因果メカニズムが発揮していることが推測される。その際に、原子力発電に対して肯定的な研究者の研究成果とその研究を支援した資金源と、原子力発電に懸念している研究者の研究成果とその研究を支援した資金源をよく調べると、その「既得利益を交換している『原子カムラ』がロックインの力として発揮している」という因果メカニズムへのもっともらしい説明を磨くことができる。その場合、因果条件をマルチ・ケース・スタディに導入し複雑性の中に論理的に一般化可能な説明を追求するQCAが大いに役に立つと考えられる。因果メカニズムの還元不可能性を重要視する批判的实在論者は、QCAが社会現象の複雑性を把握すると同時に必然的に還元してしまうと批判的に考察しつつも、QCAの複雑性に基づく研究方法としての有効性は否めないことも認めている(Gerrits and Verweij 2013)。すなわち、還元不可能性を保ちつつも研究対象へのもっともらしい説明を磨く作業は、「因果メカニズムを深掘りしてからの『凍らせる作業』」と理解することができる。観察者が一つの複雑性に富んでいる社会現象

を生成している因果メカニズムを同定して更に正当化できたとしても、結局は認識論的相対主義から逃れることは不可能なのである（実在の圧縮、実在の断片化）。

よって、筆者は野村（2016）に従い、批判的方法論的多元主義に基づく社会科学研究の展開を以下の通りに捉える。①客観的事実の規則性を従来の経験論的方法論を通じて明らかにし、②その事実や規則性を生成する諸因果メカニズムを超越的に発見し、③その規則性や客観的事実の全貌へのよりもっともらしい説明を磨くためにそれらの諸因果メカニズムを因果条件を差し替えることを通じて正当化する、という三段階を通じての弁証法的なプロセスとして理解できる。

4. 批判的实在論に基づく観察者の役割

筆者は、これまで、客観主義と主観主義、更に批判的实在論の人間論と方法論を簡単にレビューしてきた。これからは、批判的实在論の諸概念に基づき、Andrew Sayer の「主体と客体」論の構図と、佐藤郁哉の「現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳」論の構図とを統合し、批判的方法論的多元主義における研究の段階的なプロセスの概念を導入し、観察者の役割を再考する。

4.1. Andrew Sayer の「主体と客体」

Andrew Sayer（2010=2019：24-29）は实在論を存在論として観察者の外側にある存在を客体とし、それを観察する観察者の主体として「主体と客体」論を提示した。また、彼は自然科学の研究対象が「社会的に定義されてはいるが、自然に生み出されている」一方、社会科学の研究対象が「社会的に定義されかつ社会的に生み出されている」という批判的实在論の重要概念をも指摘した（Sayer 2010=2019：27）。つまり、観察者は一つの自然科学の研究対象に対して全ての条件を備えて研究した場合には、常に同じ結果が生み出される。たとえ異なる学派の理論や学説だとしても、一つの自然的な存在に対する異なる角度からの理解にしか過ぎない。例えば「コペルニクスの天動説から地動説への転回」はこれに属する。

一方、社会科学を研究する際に、社会や社会に関連する存在は、社会科学研究の認識により再生産されたり転換されたりする存在である。例えば「言葉は自存的であると同時に意存的である」というのは、批判的实在論の社会科学研究の重要な示唆である。つまり、批判的实在論者は自らが実行した研究が持つ政治的可能性や影響力に対して鋭い感度を持たなければならない（O'Mahoney and Vincent 2014：11）。社会科学研究で筆者が論じたものは、誰かが既に論じた概念に依拠していると同時に、将来の誰かの依拠となる可能性がある。分析的二元論で言い換えれば、多くの観察者は既存の説明に基づいて観察した事物に対して諸々の新たな概念や理論を論述しているが、その新しく提示された概念や理論は、また社会構造を構築する既存の一部となって次世代の観察者の論述の依拠となるのだろう（Archer 1995）。

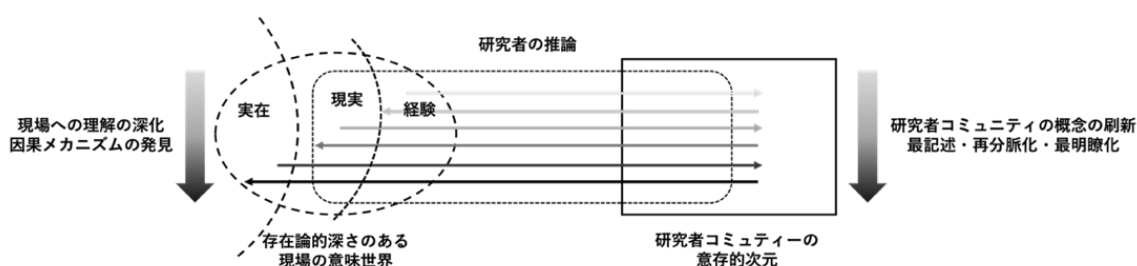
4.2. 佐藤郁哉の「現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳」

佐藤郁哉（2008：28）の「現場の言葉と理論の言葉の相互翻訳」は、研究者が非構造化インタビューやエスノグラフィーなどで取ったデータを妥当性のある形で整理するために提示された概念である。「現場の言葉と理論の言葉の相互翻訳」は、現場の言葉、理論の言葉、相互翻訳の三つの概念からなるものである。経験現場の人々の意味世界で使われる言葉を、研究者コミュニティの意味世界の理論に移し替えていくプロセスは、翻訳作業と称されている。例えば「キャリア展望の根っこの部分」のデータを整理する際に「キャリア・アンカー」に訳すことによりデータの整理はしやすくなる。質的研究を重要視する社会

科学研究者は、「研究者の個人的な意味世界」を通じて現場と理論の間に翻訳の往復作業を成し遂げる「バイリンガル」にならねばなるまい（佐藤 2015：85-86）。

「現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳」は、佐藤がデータ整理の効率と質的研究の妥当性を高めるために提示した概念であるが、筆者からすれば批判的実在論の方法論と観察者の役割を理解するための手がかりを提供していると捉えられうる。Figure 1 で示している通り、批判的実在論の階層性を導入して現場世界を深く考えることが可能である一方、研究者コミュニティ世界を認識論的相対主義の世界と捉えることも可能である。その間に仲介して翻訳作業となる研究者個人の意味世界は、因果メカニズムの発見のための推論プロセスと見做すことができる。すなわち、観察者は、研究者コミュニティに依存していながら研究対象の現場の存在に迫っていくものである。そして、現場で新しく発見された、可能性があると思定される因果メカニズムへの新たな認識はやがて研究者コミュニティにインパクトを与えるものである。Figure 1 の左右相互方向の薄い灰色から徐々に黒色になっていくいくつかの矢印は、研究者の継続的な推論である。最後の矢印が推論を超えたのは、批判的実在論の推論の多くが超越的な推論であることを示している。また、両サイドにある下向きの矢印は、現場への理解を深めるとともに因果メカニズムが浮き彫りになり、それと同時に研究者コミュニティ世界も刷新され、再記述されたり再分脈化されたりするのである。

Figure 1 批判的実在論における現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳



(出典：佐藤 2008：28 に筆者加筆)

4.3. 社会科学における観察者の役割

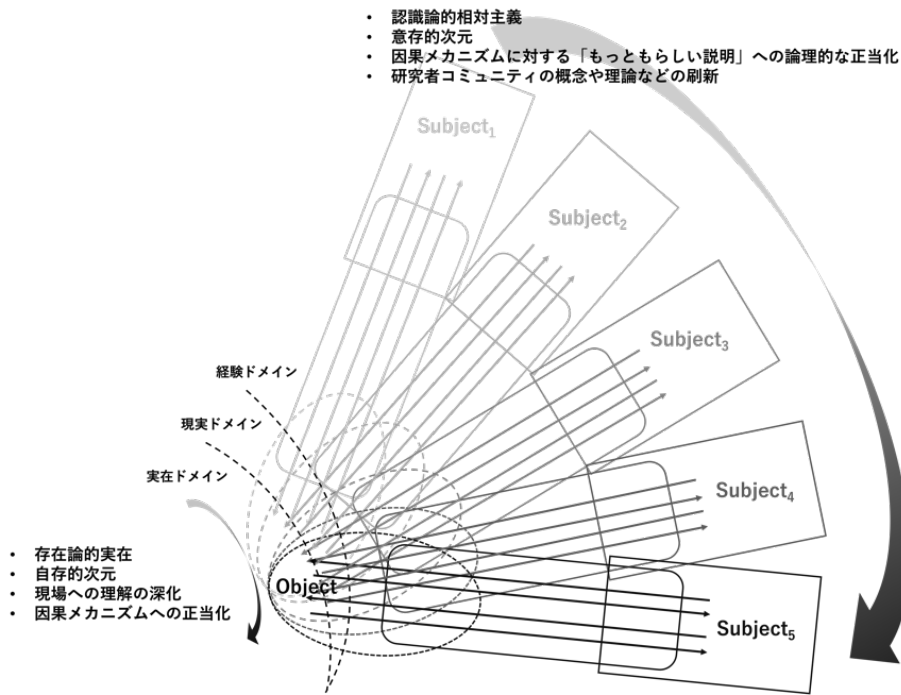
筆者は Sayer の「主体と客体」論と佐藤の「現場の言葉と理念の言葉の相互翻訳」論を簡単にレビューしてきた。Sayer (2010=2019) の構図は批判的実在論の構図として有名ではあるが、観察者が社会科学研究において役割を説明することには不十分である。そこで、筆者は佐藤 (2008) の構図と統合してから、更に野村 (2016) の批判的方法論的多元主義の段階的なプロセスを通じて、観察者の役割を再考する。

野村 (2016) が述べている通り、インテンシブ・アプローチは、因果メカニズムを発見するための研究方法である。Figure 1 が示しているように、一人または一つの研究グループが研究対象である社会現象に対して研究調査を集中的に行い、その現象を生成する因果メカニズムを推定することになる。次の段階は、エクステンシブ・アプローチを通じてその推定されている因果メカニズムを正当化するステップである。因果メカニズムを正当化するため、異なる条件をつけることによって強化したり相殺させたりして因果メカニズムをより顕在化することができる。そうしたやり方は、批判的実在論者からすれば「凍らせる作業」、すなわち実在を圧縮する (Gerrits and Verweij 2013) ことになりかねないが、因果条件をつけることによって因果メカニズムを正当化できて研究対象に対するもっともらしい説明を磨けることにな

る。もっともらしい説明を磨くことにより、研究者コミュニティが持つ社会現象への概念ないし理論が更に再記述されたり再分脈化されたりするのである (Figure 2)。

観察者の役割について、筆者は従来の決定論を重んずる客観主義者または宿命論を認めるペシミスト (野家 2001:5) とは異なり、より良きより自由な未来に赴くオプティミストであると考えたい。観察者はより良き未来に赴くために、考えや動きを束縛・可能にする既存の構造から目を逸らしてはならない。人間論からすれば、今の思想ないし信念を構築した基盤はある種の社会構造と捉えられる。ただし、批判的实在論の認識論的相対主義からすれば、そうした思想基盤は絶対に正確なものとは限らない。よって、今現在の観察者の思想を束縛・可能にする社会構造を理解するため、その構造を構築し固定させた因果メカニズムを理解する必要がある。すなわち、その構造に対して「なぜ」と「どのように」を問い、因果メカニズムがそれを形成してきた経路を遡って探っていくことが必要である (Sydow et al. 2009; Garud et al. 2010)。観察者が今現在の認識を構築した構造からより良き未来に赴くため、今の観察者が立脚している場所を理解する必要があり、それは「今の観察者が立脚している所を構築してきた歴史的な経路」を理解することを意味している。Carr (1961=1962) の有名な言葉で言い換えれば「過去と現在との絶えない対話」とのことである。実在は常にそこにある。観察者はその実在に対して絶え間なく近づこうとしているが、観察者の認識は過去から構築されてきたものであるため、いくら近づこうとしても近づくことができないのである。それでも、観察者は引き続きそれに近づくことを惜しまずに赴いていく。

Figure 2 社会科学における観察者の役割



(出典：筆者作成)

5. 本研究ノートのまとめ及び中小企業研究への示唆

筆者は「客-主」対立の人間論と方法論を見てから、その不幸な対立を乗り越えようとする批判的实在論をレビューしてきた。批判的实在論は存在論的実在性 (存在)、認識論的相対主義 (認識)、社会行動の

形態転換（人間）、批判的方法論的多元主義（方法）に基づき、弁証法的なプロセスを通じて社会現象を生成する因果メカニズムを発見し、もっともらしい説明を磨いて付与する科学哲学思想である。批判的实在論の祖である Roy Bhaskar が「弁証法とはそうした道のりであり、それこそ自由の脈動に他ならない」と述べた通り（Bhaskar 1993=2015：588）、観察者は社会現象を深掘りし、やがて自らの認識に戻ってくるが、観察者も前よりもより客観的・自由になっていくのである。観察者は「広がりつつある地平線」²に直面し、オプティミストとしてより良き未来に赴くために「現在と過去との絶えない対話」を行なっているのである（Carr 1961=1962：223-225）。

最後に組織論とりわけ複雑性が富む中小企業研究への示唆についてまとめる。本研究ノートでは特定の産業を具体例（ハイテク産業のイノベーション経路、日本の発電産業、ヨット産業）として取り上げて議論したが、中小企業領域では特に批判的な考察や観察者の役割に注目する必要がある。なぜなら中小企業研究は社会科学の一環としていながらも利用可能な経営指標データが乏しいし、信用調査機関を通しての数値があるとしても十分な信頼度や安定性を備えているかも疑問視されるからである（三井 2016：9）。そうした議論に基づき、学術研究を通じて得た知恵は実務世界で発生したことは異なると言われており、世界中で開講されている MBA はそれに対応するものだとも言われている。筆者の仮説であるが、それは「学術研究と現場の推論方式の違いによる現象」なのではないか。学術研究ではきちんとした科学手続きに沿ってデータを得て分析し結果を提示するが、中小企業などのように複雑性に富んだ変動の激しい現場では（オープン・システムに対して）限られた範囲で情報を得て分析することしかできない。すなわち、学術研究者はある種の閉鎖した世界において再現性が高い論理的な説明をおこなおうとする一方で、現場人はオープン世界で常に超越的に物事を観察して結論を導こうとする（そして管理手法や経営戦略を立てる）のであると考えられる。どちらが正確であるとは言えないが、双方の（認識論的）理解を互いに接近させることは必要であろうし、批判的实在論が一つのメタ理論としての基盤を提供することはできるであろう。

参考文献

- Ackroyd, S., and Karlsson, J. C. (2014). *Critical Realism, Research Techniques, and Research Designs*. Edwards, P. K., O' Mahoney, J., and Vincent, S. (eds). *Studying Organizations Using Critical Realism A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press, pp.21-45.
- Archer, M. S. (1995). *Realist Social Theory: the morphogenetic approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Berger, P. L., and Luckmann, T. (1966). *The social Construction of Reality*. London: Penguin University Books.
- Bhaskar, R. (1975). *A Realist Theory of Science*. London: Verso.
- Bhaskar, R. (1993). *Dialectic: The Pulse of Freedom*. London: Routledge. （式部信訳（2015）『弁証法 自由の脈動』作品社）
- Bhaskar, R. (1998). *The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Science, Third Edition*. London: Routledge.
- Burrell, G., and Morgan, G. (1979). *Sociological Paradigm and Organizational Analysis: Elements of the Sociology of Corporate Life*. London: Routledge.

² Carr (1961=1962) は「広がる地平線」というアナロジーを使い、世界がグローバリゼーションすればするほど、従来の欧米中心史観から脱却しないといけないと論じている。

- Danermark, B., Ekstorm, M., and Karlsson, J. Ch. (2019). *Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences, Second Edition*. London: Routledge.
- Delbridge, R., and Edwards, T. (2013). Inhabiting Institutions: Critical Realist Refinements to Understanding Institutional Complexity and Change. *Organization Studies*, 34(7), 927-947, <http://dx.doi.org/10.1177/0170840613483805>
- Durkheim, E. (1897). *Le Suicide: Étude de sociologie*. Paris: Les Presses universitaires de France. (宮島喬訳 (1985) 『自殺論』中央公論新社)
- Carr, E. H. (1961). *What is History?*. London: Penguin Books. (清水幾太郎訳 (1962) 『歴史とは何か』岩波書店)
- Garud, R., Kumaraswamy, A., and Karnøe P. (2010). Path Dependence or Path Creation?. *Journal of Management Studies*, 47(4), 760-774, <http://dx.doi.org/10.1111/j.1467-6486.2009.00914.x>
- Geertz, C. (1988). *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. California: Stanford University Press.
- Gerrits, L.M. and Verweij, S. (2013). Critical Realism as a Meta-Framework for Understanding the Relationships between Complexity and Qualitative Comparative Analysis. *Journal of Critical Realism*, 12 (2), 166-182, <https://doi.org/10.1179/rea.12.2.p663527490513071>
- Greener, I. (2005). The Potential of Path Dependence in Political Studies. *Politics*, 25(1), 62-72, <http://dx.doi.org/10.1111/j.1467-9256.2005.00230.x>
- Kahwati, L. C., and Kana, H. L. (2019). Chapter1: Qualitative Comparative Analysis as Part of a Mixed Methods Approach. In Kahwati, L. C., and Kana, H. L. (eds). *Qualitative Comparative Analysis in Mixed Methods Research and Evaluation*. New York: SAGA Publishing, 1-18.
- Meuer, J., and Fiss, P. (2020). Qualitative Comparative Analysis in Business and Management Research. *Oxford Research Encyclopedia of Business and Management*, <http://doi.org/10.1093/acrefore/9780190224851.013.229>
- O' Mahoney, J. and Vincent, S. (2014). Critical Realism as an Empirical Project: A Beginner's Guide. Edwards, P. K., O' Mahoney, J., and Vincent, S. (eds). *Studying Organizations Using Critical Realism A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press, 1-20.
- Ponterotto, J. G. (2006). Brief Note on the Origins, Evolution, and Meaning of the Qualitative Research Concept Thick Description. *The Qualitative Report*, 11(3), 538-549, <https://doi.org/10.46743/2160-3715/2006.1666>
- Sayer, A. (2010). *Method in Social Science: A realist approach, Revised second edition*. London: Routledge. (佐藤春吉監訳 (2019) 『社会科学の方法 実在論的アプローチ』ナカニシヤ出版)
- Sydow, J., Schreyögg, G., and Koch, J. (2009) Organizational Path Dependence: Opening the Black Box. *Academy of Management Review*, 34(4), 689–709, <https://doi.org/10.5465/amr.34.4.zok689>
- Sydow, J., Windeler, A., Müller-Seitz, G., and Lange, K. (2012) Path Constitution Analysis: A Methodology for Understanding Path Dependence and Path Creation. *Business Research*, 5, 155–176, <https://doi.org/10.1007/BF03342736>
- Sydow, J., Schreyoegg, G., and Endo, T. (2021). Industry Dynamics and Path Dependencies: Wind Energy in Europe and Asia. Kipping, M., Kurusawa, T., and Westney, E. (eds). *The Oxford Handbook of Industry Dynamics*. Oxford: Oxford University Press, <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.3796074>

- Tashakkori, A., and Creswell, J.W. (2007). Editorial: The New Era of Mixed Methods. *Journal of Mixed Methods Research*, 1(1):3-7, <http://doi.org/10.1177/2345678906293042>
- Weber, M. (1920). Die protestantische Ethik und der >>Geist<< des Kapitalismus, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd.1, SS. 17-206. (大塚久雄訳 (1988) 『プロテスタントイ ズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店)
- 坂下昭宣 (2002) 『組織シンボリズム：論点と方法』白桃書房.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 佐藤郁哉 (2015) 「質的データ分析の基本原則と QDA ソフトウェアの可能性」『日本労働研究雑誌』 Vol.52(12), 81-96.
- 須田敏子 (2019) 『マネジメント研究への招待：研究方法の種類と選択』中央経済社.
- 野家啓一 (2001) 「「実証主義」の興亡」『理論と方法』 Vol.16(1), 3-17.
- 野村優 (2016) 「批判的実在論に基づいた 2 つの研究デザインによるトライアングレーションの試み— インテンシヴおよびエクステンシヴ概念の再検討を通じて—」『立命館産業社会論集』 Vol.51(4), 139-157.
- 三井逸友 (2016) 「中小企業研究の課題と方法—公益財団法人中小企業研究センターの 50 年の歴史に寄せて—」『中小企業研究センター年報』 2016 年版, 3-19.